

経営体育成基盤整備事業 (大久地区)の完了



大久地区の経営体育成基盤整備事業が、平成14年3月の設立総会以降、構想・調査・工事着手、東日本大震災の影響による工事の中断を経て、12年間かかり平成26年末に面

積80ha、一面あたり平均50a、最大14ha）

このように、今後は各地で基盤整備が進められていくと思いますが、受け手の農業経営体が持続可能な農業産業として成り立つためには、農家が経営体としての自覚を高め、経営判断力・技術力・販売力などの向上に積極的に努め、課題をひとつひとつ自ら解決できることが必要不可欠であると思います。

そのために「儲かる持続可能な農業経営を目指す」という考え方のもと、
1. 担い手となる農業経営体同士の連携組織を作る

2. 大型機械を導入し、労働時間短縮やコスト削減による経営規模の拡大

3. 園芸作物を取り入れた複合営農及び加工・商品化・広域販売

以上の取り組みが必要になってきます。

また、担い手以外の農地を所有する住民も含めた農村地域全体で農地・農村を守る意識づけと、農地の維持管理にかかる地域資源保全向上対策への取り組みが必要になります。

地域の皆さんが集まり、時間をかけても、10年後、20年後の将来に向けた話し合いをすることが、回り道のようにも一番の近道なのだ、今回の基盤整備を通じて改めて感じました。
(執筆・撮影 飯高敬一委員)

がんばる農業者 あの人この人

今回ご紹介するのは、
「いわきとっとり芋赤沼生産部会」
の活動です。



とっとり芋とは、従来の長芋より粘性が強く、自然薯よりは粘性が少ない酒とつくりのような形をしている芋です。

平下神谷の赤沼地区では、以前からとっとり芋の栽培が行われていました。その中で、酒とつくりのような形をした芋が偶然発見されました。食感が長芋と自然薯の中間であり、形も手ごろだったので品種の固定化を図り、特産品として生産が開始されました。

夏井川流域の砂壤土である赤沼地区は、とっとり芋の栽培に適していて、現在は8名の栽培生産者がいます。作付面積は平均5アールで、市場への出荷時期は10月中旬から翌年の1月中旬となっています。山芋に比べて水分と脂肪が低く、灰分とたんばくと糖質が高くなっていて、食べ方としてはとろろ汁や切り芋、天ぷらといったものがあります。また、郵便局と連携してゆうパックでの販売発送もしており、毎年県内だけでなく、県外からも多くの注文が寄せられています。

生産者の高齢化や価格の伸び悩み等によって生産者の数は年々減少傾向にあります。価格形成や労働力軽減等に対して工夫を重ねて対策を考えたいとのことです。
(執筆・撮影 渡邊和夫委員)